# Ṛgveda I 82
# *hariyójana-*, *bráhmaṇ-*, 「新しい歌」, 1. Sg. Konjunktiv

堂　山　英次郎

目次：1　RV I 82　—テキストと訳—：1.1—1.6
2 「ハリ繋ぎ」
2.1 「ハリ繋ぎ」と *bráhmaṇ-*
3 「新しい歌」
4　1. Sg. Konjunktiv
5　結論
註

## 1　RV I 82　—テキストと訳—

リグ・ヴェーダ（以下RV）I 82 は，ソーマを用いた儀礼にインドラ神を招いて饗応し，儀礼を無事成功裡に終わらせた後で，詩人がそれを確認し，再びインドラを天界へ送り帰す場面を主題としている。背景にあるのは，恐らく牛の掠奪を成功させる為に行われたソーマの儀礼で(第 4 詩節参照)，この歌はその締めくくりとして歌われたと考えられる。歌の中心テーマは，インドラの戦車に二頭のハリたち（*háriī*：インドラの戦車を引く二頭の栗毛の馬。元々「黄緑色の」の意）を繋ぐ儀礼，*hariyójana-*「ハリ繋ぎ」（→ **2** を参照）である。ここでは第 4 詩節に，Vṛddhi 形 *hāriyojaná-* が「ハリ繋ぎ」の際にインドラにふるまわれる別れの盃を形容する語として用いられ（*pā́tra- hāriyojaná-*），この盃が「ハリ繋ぎ」の重要な構成要素であったことを示している[1]。

1 *úpo ṣú śr̥ṇuhī gíro mághavan mātathā*[2] *iva /*
*yadā́ naḥ sūnr̥tāvataḥ kára ā́d arthāyāsa ī́d yójā nv̄ índra te hárī //*
しかと　君は耳を傾けよ（Präs. Iptv.），歌たちに。
有能な者よ[3]，応じぬ者のようでは　あるな。
もし　我々を　十分な雄々しさを備えた者に
君がすることになるならば（*káraḥ* Aor. Konj.），そうすれば
　　まさに［自らの］目的を君は得ることになろう（Präs. Konj.）。
さあ，インドラよ，君の　二頭のハリたちを　私は繋ごう（Aor. Konj.）。

詩人はインドラに讃歌を聞き入れるよう要請する。「十分な雄々しさを備えた者にする」とは，掠奪行に相応しい者にすることを意味すると考えられ，その条件と引き換えに，インドラの目的（ここでは恐らく，戦車にハリたちを繋ぎ，インドラを天界へ送り出すこと）が達せられるであろうことが述べられている。*yadā́* に導かれる条件節は，時間的に主節の内容に先行して後者が起こる為の原因・きっかけとなる事態を表す[4]。ここでは主節・従属節ともに Konj. が使われているので，未来の事態が起こるための前提条件とその帰結を示している。つまり「自分たちの望みを相手が叶えて初めて，こちらも相手の望みに応じるだろう」というニュアンスが強い。

最終 Pāda *yójā* ... は，以後 1-5 詩節全ての Anuṣṭubh 部分（8 音節×4 Pāda）に付加されている[5]。（→ **4** を参照）

2 *ā́kṣann āmī́madanta h̥y áva priyā́ adhūṣata /*
*ástoṣata svábhānavo vi-prā́ náviṣṭhayā matī́ yójā ... //*
彼らは食べた（Aor. Ind.）。彼らはまさしく酔った（Aor. Ind.）。
好ましい［品々］を　彼らは振るい落とした（Aor. Ind.）。
自らの輝きを持つ　霊能者たちは
最新の詩（「思考」）によって　称えられた（Aor. Ind.）。…以下繰返し

Aor. Ind. は，今目前で起こったばかりのことを（“aktuell”），或いは過去の事実をそのようなこととして確認する（“Konstatierung”）機能を持つ。ここで一貫して使われる Aor. Ind. には前者の機能が想定され，インドラに随行する若い神々（マルト神たち）が供物やソーマを受納し，その証拠として好ましい品々[6]を振るい落としたこと，よって讃歌が受け入れられたことを，詩人が目前で起こったばかりの出来事として捉えている。（→ **3** を参照）

3 *susaṃdṛ́ṣaṃ tuvā vayáṃ mághavan vandiṣīmáhi /*
*prá nūnáṃ pūrṇávandhura stutó yāhi váśāṁ ánu*[7] *yójā ... //*
良き全貌を備えた君を　我々は
有能な者よ，称讃したい（Aor. Opt.）。
戦車の座席を一杯にして　今こそ
称えられて　君は発進せよ（Präs. Iptv.），望みのままに。…

「良き全貌を備えた君を称讃する」とは，称讃によってインドラを「欠陥の無い完全な姿」或いは「機嫌の良い顔」にすることを表すと考えられる。

ここまでが，専ら既に行ったインドラへの饗応とその見返りとしての望みを確認するのに対し，第 4 詩節以降では，具体的な「ハリ繋ぎ」の儀礼が描写される。

4 *sá ghā táṃ vṛ́ṣaṇaṃ rátham ádhi tiṣṭhāti govídam /*
*yáḥ pā́traṃ hāriyojanáṃ pūrṇám indra cíketati yójā ... //*
その人こそは　この雄々しい戦車に
乗ることになろう（Präs. Konj.），牛たちを手に入れる［戦車］に，
もし彼が　ハリ繋ぎに属するコップが
いっぱいに満たされているのに
インドラよ，気付くことになるならば（Perf. Konj.）。…

条件節や関係節を伴う複文では，Konjunktiv（→ **4** を参照）が未来全般への言及を通じて，特定の時に限定されない普遍的・一般的事態，ausserzeitlicher (genereller) Sachverhalt，を表すことが多い：「…する時は/…する度に/…する者は，いつでも～」。同様の機能が Präs. Ind. と Injunktiv にも想定され，この種の意味の複文（"gnomische Periode", HOFFMANN Inj. 115, 238）では殆ど，主節と従属節とに同じ Modus が使われる[8]。ここでも主節及び関係節双方に Konjunktiv が使われており，「ハリ繋ぎに属する盃」のことに気付いて（*cí-ketati*），つまりその重要性を理解した上で，これをインドラに供する者だけが牛の掠奪に成功する［戦車に乗る］（*tiṣṭhāti*），という一般的表現と解釈出来る。一般論で述べることによって，繰り返し「ハリ繋ぎ」への意志を表明してきた詩人たち自身が，当然この記述に当てはまるべき者であるということを，半ば脅迫的に確認・強調していると考えられる。

5 *yuktás te astu dákṣiṇa utá savyáḥ śatakrato /*
*tḗna jāyā́m úpa priyā́m mandānó yāhiy ándhaso yójā ... //*
繋がれて　あれ（Präs. Iptv.），君の　右側の［馬］は。
そして　左側の［馬］も，百の念力を持つ者よ。
これによって　好ましい妻の下へと
君は走れ（Präs. Iptv.），［ソーマの］若芽たちに酔って。…

6 *yunájmi te bráhmaṇā keśínā hárī úpa prá yāhi dadhiṣé gábhastiyoḥ /*
*út tvā sutā́so rabhasā́ amandiṣuḥ*
*pūṣaṇvā́n vajrin sám u pátniyā madaḥ //*
*bráhmaṇ-* によって　私は繋ぐ（Präs. Ind.），
たてがみ持つ　君の二頭のハリたちを。
君は（妻の）下へと発進せよ（Präs. Iptv.）。
［自らの］両手に［手綱を/ヴァジュラを］　君は置き添えた（Perf. Ind.）。

君を　搾られた［ソーマ］たちが　激しく　酔い昂らせた（Aor. Ind.）。
妻と伴に，ヴァジュラを持つ者よ，プーシャンを伴う君は酔う。

詩人は二頭のハリを繋ぐ号令をかけた後，今現に繋いでいるものと想像しているので（「*brāhmaṇ-* によって」→ **2.1** を参照），Präs. Ind. *yunájmi* には Koinzidenzfall「発話と内容の共起/同時進行」の機能が考えられる[9]。Perf. Ind. *dadhiṣé* は Perf. 本来の「到達・達成した状態（erreichter Zustand）」を表し[10]，インドラが手綱/ヴァジュラを手に取り終え，現在持った状態にあることを示している[11]。これに対し Aor. Ind. *amandiṣuḥ* は，インドラがソーマを十分に味わい酔ったことを，第 2 詩節と同様，起きたばかりの過去として捉える。d-Pāda では Padapāṭha *amadaḥ* Ipf. に反して *madaḥ* Präs. Inj. と解釈した[12]。Inj. Präs. は，諸々の神格の性質や行いを一般論として表すことが多く（genereller Sachverhalt），この機能はインドラ讃歌でも多く見出される[13]。*madaḥ* も同様に，インドラがソーマのもてなしを受け，妻のもとへ戻った後もその効力（酔い）の中にいるということを，インドラに常に当てはまる性質・個性として表していると考えられる。

この詩節だけは Jagatī 韻律で歌われている。RV では，一篇の最後の歌だけがそれまでとは異なる韻律で歌われることがあるが[14]，このように Jagatī が最後に現れるのは極めて異例である[15]。

## 2 「ハリ繋ぎ」

詩人（インドラ）が，二頭の或いは複数のハリたちを，インドラの戦車或いはくびき（*dhúr-*）に繋ぐという記述は RV の随所に見られる[16]。I 82 に歌われる「ハリ繋ぎ」がインドラに対する送別の歌と解釈されるのに対し，他の箇所では，インドラを歓迎する場面で歌われることが圧倒的に多い[17]：

**I 177,1** *ā́ carṣaṇiprā́ vṛ́ṣabhó jánānāṃ rā́jā kṛ́ṣṭīnāṃ puruhūtá índraḥ / stutáḥ śravasyánn ávasópa madrīg yuktvā́ hárī vṛ́ṣaṇā yāhy arvā́ṅ*「こちらへ［やって来

い]，境界を満たす　人々の雄牛，人間たちの王，多く呼ばれるインドラは。称えられて　聞こえを求めつつ　助力を伴い　そばへ，私の方へ，二頭の種馬であるハリたちを繋いで　やって来い（Präs. Iptv.），こちらを向いて。」**2** *yé te vṛ̥ṣaṇo vṛ̥ṣabhā́sa indra brahmayújo vṛ̥ṣarathāso átyāḥ / tā́n ā́ tiṣṭha tébhir ā́ yāhy arvā́n hávāmahe tvā sutá indra sóme*「君の，インドラよ，猛々しい種馬たち，*bráhman-* によって繋がれた，雄牛のような車を引く競走馬たちである，これらに　君は乗れ（Präs. Iptv.）。これらと伴に　やって来い（Präs. Iptv.），こちらを向いて。君を，インドラよ，搾られたソーマの前で（へと）我々は呼ぶ（Präs. Ind.，Koinzidenzfall）。」**3** *ā́ tiṣṭha rátham vṛ̥ṣaṇam vṛ̥ṣā te sutáḥ sómaḥ pāriṣiktā mádhūni / yuktvā́ vṛ̥ṣabhyā́m vṛ̥ṣabha kṣitī́nā́m háribhyā́m yāhi pravátópamadrik*「猛々しい車に　君は乗れ（Präs. Iptv.）。君に　猛々しいソーマが　搾られた。甘い飲物たちが　注ぎ入れられている。［車を］猛々しい二頭と　繋いで[18]，諸々の部族の雄牛よ，二頭のハリたちと共に　我先にと　君は走れ（Präs. Iptv.），そばへ，私の方へ。」**4** *ayā́m yajñó devayā́ᵃyam miyédha imā́ bráhmāṇy ayám indra sómaḥ / stī́rṇā́m barhír ā́ tú śakra prá yāhi pī́bā niṣā́dya ví mucā hárī ⁱhá*「ここに　神々へ向かう祭式がある。ここに　祭儀の宴が。ここに　諸々の*bráhman-* が。ここに，インドラよ，ソーマが。敷き草は　播き広げられている。さあこちらへ，強力な者よ，君は発進せよ（Präs. Iptv.）。座り込んで　君は飲め（Präs. Iptv.）。ここで　二頭のハリたちを　君は解け（Aor. Iptv.）。」**5** *ó súṣṭuta indᵃra yāhy arvā́n úpa bráhmāṇi māṇyásya kāróḥ / vidyā́ma vástor ávasā gṛ̥ṇánto vidyā́meṣā́m vṛ̥jánaṃ jī́rádānum*「よく称えられて　やって来い（Präs. Iptv.），インドラよ，こちらを向いて。Māna 家に属する詩人の　諸々の*bráhman-* のそばへ。我々は知りたい（Perf. Opt.），（歓迎歌を）歌いつつ，（新たな）朝焼けについて，（君の）助力によって。我々は知りたい（Perf. Opt.），生き生きしたしずくを持つ　滋養に富む集団について。」

**III 35,1** *tíṣṭhā hárī rátha ā́ yujyámānā yāhī́ vāyúr ná niyúto no ácha / pī́bāsy ándho abhī́sṛṣṭo asmé ī́ndra svā́hā rarimā́ te mádāya*「車に繋がれつつあるハリたちに　君は乗れ（Präs. Iptv.）。ヴァーユが　牽引馬たちに［乗る］ように，我々の方へと　やって来い（Präs. Iptv.），（ソーマを）目がけて飛び出した君は　［ソーマの］若芽を　我々のもとで　飲むがよい（Präs. Konj.）。インドラよ，スヴァーハー，君の酔いの為に　我々は［ソーマを］贈った（Perf. Ind.）。」**2** *úpājirā puruhūtā́ya sáptī hárī ráthasya dhūrṣú v ā́ yunajmi / dravád yáthā sā́mbhṛtaṃ viśvátaś cid úpemā́m yajñā́m ā́ vahāta ī́ndram*「機敏な　二頭の俊足の［馬］たちを　多く呼ばれる［インドラ］の為に，ハリたちを　戦車のくびきたちに　私は繋ぐ（Präs. Ind.，Koinzidenzfall），あらゆる面で整えられた［祭式］へ　急いで［彼を連れてくる］べく。この祭式のもとへ　インドラを　［二頭は］連れてくるがよい（Präs. Konj.）。」**3** *úpo nayasva vṛ̥ṣaṇā tapuṣpó- ᵤtém ava tvā́m vṛ̥ṣabha svadhāvaḥ / grā́setām áśvā ví mucehá śóṇā divédive sadṛ̥ṣīr addhi dhānā́ḥ*「熱を飲む猛々しい二頭を　［私の］そばへ君は導け（Präs. Iptv.）。そして　彼らを　援助せよ（Präs. Iptv.），きみは，自ら

の決定を持つ雄牛よ。二頭の馬たちは 喰らえ (Präs. Iptv.)。赤味を帯びた二頭をここで 君は解け (Aor. Iptv.)。毎日毎日 君は食べろ (Präs. Iptv.), 同じ見かけをした穀物たちを。」4 *bráhmaṇā te brahmayújā yunajmi hárī sákhāyā sadhamā́da āśū́ / sthirā́ṃ rā́thaṃ sukhā́m indrādhitíṣṭhan prajānán vidvā́ṃ úpa yāhi sómam*「*bráhmaṇ-* によって 私は繋ぐ (Präs. Ind., Koinzidenzfall), *bráhmaṇ-* によって繋がれた 君の二頭のハリたちを, 酔いを伴にする 俊足の 二人の盟友たちを。堅固な 心地よい戦車に, インドラよ, 乗り込みながら 知者として 明察しつつ ソーマのそばへ やって来い (Präs. Iptv.)。」

詩人はソーマを搾り (I 177, 2, 3, III 35, 1) 敷き草を敷いて (I 177, 4), インドラを歓待する準備が万事整ったことを告げ, 自らハリたちをインドラの戦車/くびきに繋ぎ (III 35, 2), 或いはインドラに繋ぐよう命じ (I 177, 1, 3), その戦車/ハリたちに乗り (I 177, 2, 3, III 35, 1, 4) 儀礼へやって来るようインドラに要求している (I 177, 1-5, III 35, 1-4)。到着したインドラは駆ってきたハリたちを戦車/くびきから解いた後 (*ví muca*, I 177, 4, III 35, 3)[19], 敷き草に座ってソーマを味わい酔うことになる (I 177, 4)。[20]

一方 I 82 では, インドラが天界へ帰れるよう, 解いてあったハリたちを再びインドラの戦車に繋ぐ儀礼が歌われている。同様に「ハリ繋ぎ」がインドラへの送別の歌と解釈される箇所として, I 61, 16 ; 62, 13 (以下を参照) ; 63, 9[21], III 53, 4 が挙げられるが, 最初の三箇所はいずれも各 sūkta の最終詩節であり, 以下に述べる特徴からも, 儀礼の終わりを成す「ハリ繋ぎ」を象徴的に表すと考えられる。[22]

*hariyójana-*「ハリ繋ぎ」の語は I 62, 13 に一度, Vṛddhi 形 *hāriyojaná-* は I 82, 4 の外には I 61, 16 で例証されているので, これらの語は全て送別の際の「ハリ繋ぎ」が歌われる箇所に集中していることになる。これらを含む sūkta は, それぞれの詩人の名前, Gotama Rāhūgaṇa (I 82), Nodhas Gautama (I 61 ; 62) から, 同じゴータマー族に由来すると考えられ, また I 62, 13 に見える *sanāyánt- hariyójana-*「古くからあるハリ繋ぎ」という表現は, 送別の際の「ハリ繋ぎ」がこの詩人の家系では伝統的に歌われてきたテーマであって, 特にこれに関係する術語として *hari°/hāri°* の語が使われていた可能性を示唆するも

のであろう。

**I 61, 16ab** *evā́ te hāriyojanā́ suvr̥ktī́- ;ndra brā́hmāṇi gótamāso akran*「この様に，君の(為の)，ハリ繋ぎに属する者よ，よき歌によって，インドラよ，諸々の *brā́hmaṇ-* を　ゴータマたちは　つくった（Aor. Ind.)。」

ここでは，*hāriyojanā*(Vok.)[23]は，I 82, 4 と異なり，インドラ自身のことを「ハリ繋ぎに与る者」と呼んでいると考えられる。

**I 62, 13a-c** *sanāyaté gótama indra nā́vyam ā́takṣad brā́hma hariyójanāya / sunīthā́ya naḥ śavasāna nodhā́ḥ*「古くからあるハリ繋ぎのために，ゴータマは，インドラよ，新しい *brā́hmaṇ-* を　形作った（Ipf.)，我々の（為の）よき導きを持つ［君］の為に，増長する者よ，ノーダスは。」

## 2.1 「ハリ繋ぎ」と *brā́hmaṇ-*

第 6 詩節では，ハリたちを繋ぐ際に *brā́hmaṇ-* という概念が重要な役割を果たしている。*brā́hmaṇ-* とは，詩人が伝統的な詩的作法(表現，内容，技巧，韻律など）と，正しい文法に従って歌い上げた正しい言語表現（とその発語）が持つ霊的実現力を指すと考えられる[24]。この理解に立てば，*brā́hmaṇā* (Inst.) *yoj / yuj* という表現は「言葉の霊力によって（を使って）繋ぐ」ことを意味すると思われる。つまり，この詩節で詩人は，「ハリ繋ぎ」を上述の意味での正しい言語表現によって歌い上げた結果，そこに宿る *brā́hmaṇ-* の力で，それを言葉通りに実現していると考えているのであろう[25]。この想定は，以下に見る「新しい歌」の概念（→ **3** を参照）や，1. Sg. Konj. の機能（→ **4** を参照）の理解によっても裏付けられる。

「ハリ繋ぎ」が *brā́hmaṇ-* によってなされるという表現は，他にも上述 III 35, 4（→ **2** を参照）と，次の箇所に見られる：

**I 84, 3** *ā́ tiṣṭha vr̥trahan ráthaṃ yuktā́ te brā́hmaṇā hárī / arvācī́naṃ sú te máno*

*grā́vā kṛ̥notu vagnúnā*「君は乗れ (Präs. Iptv.), ヴリトラを殺す者よ, 戦車に。君のハリたちは *bráhmaṇ-* によって 繋がれている。(ソーマを挽く) 挽き臼は 君の思考を しかと こちらへ向けよ (Präs. Iptv.), 響きによって。」

また *bráhmaṇ-* を宿す具体的な発語形態として, *vácas-*「言葉」, *arká-*「讃歌」, *gír-*「歓迎歌」, *gā́thā-*「歌」も, 同様にハリたちを繋ぐ為のものとして記述されている:

**II 18, 3**[26] *hárī nú kaṃ rátha índrasya yojam āyái*[27] *sūkténa vácasā návena / mó ṣú tvā́ṃ átra bahávo hí víprā ní rīraman yájamānāso anyé*「今 ハリたちを インドラの戦車に 私は繋ぐ (Aor. Inj., Koinzidenzfall), [彼が] 来る為に, よく発語された 新しい言葉によって。決して きみを この際 他の祭主たちが —見者たちは沢山いるので— 自分のもとに止まらせてはならない (*mā́*+Aor. Inj.)。」[28]

**V 33, 2ab** *sá tvā́m na indra dhiyasānó arkáir hárīṇ̥ām vṛ̥san yóktram aśreḥ*「そういう君は, インドラよ, 我々の讃歌によって 思慮を働かせつつ ハリたちの (Pl.) 手綱を, 雄牛よ, 寄り掛けた (Aor. Ind. trans.)[29]。」

**VII 36, 4** *girā́ yá etā́ yunájad dhárī ta índra priyā́ surāthā śūra dhāyū́ / prá yó manyúṃ rīrikṣato mināt̥y ā́ sukrátum aryamáṇaṃ vavṛ̥tyām*「讃歌によって 君の, インドラよ, このハリたちを, よき戦車を伴う 競争にはやる 好ましい二頭を, 勇者よ, 繋ぐことになる (Präs. Konj.) 者として[30], 傷つけようとする者の意思を挫くよき意志力持つアリヤマンを 私はこちらへ向かせたい (Aor. Opt.)。」

**VIII 98, 9** *yuñjánti hárī iṣirásya gā́thayo- ᵘráu rátha urúyuge indravā́hā vacoyújā*「力みなぎる [インドラ] のハリたちを 歌によって 彼らは繋ぐ (Präs. Ind.), 幅広のくびきを持つ 幅広の戦車に, インドラを運ぶ 言葉によって繋がれた両者を。」

この様に *bráhmaṇ-* (を宿す発語) によって繋がれるハリたちは, *brahmayúj-*「言葉の霊力によって繋がれた」や, *vacoyúj-*「言葉によって繋がれた」の呼称を持つ[31]。

*brahmayúj-*: **I 177, 2, III 35, 4 → 2** を参照

**VIII 1, 24** *ā́ tvā sahásram ā́ śatáṃ yuktā́ ráthe hiraṇyáye / brahmayújo hárayа indra keśíno váhantu sómapītaye*「君を 黄金色の戦車に繋がれた千頭が, 百頭が, *bráhmaṇ-* によって繋がれた たてがみ持つハリたちが, インドラよ, 連れてこい (Präs. Iptv), ソーマを飲む為に。」

**VIII 2, 27** *ēhá hárī brahmayújā śagmā́ vakṣataḥ sákhāyam / gīrbhíḥ śrutám gírvaṇasam*「ここへ　*brā́hmaṇ-* によって繋がれた　剛力のハリたちが　盟友（インドラ）を　連れてくるがよい（Aor. Konj.），歌たちによって名高い　（歓迎）歌を欲しがる［彼］を。」

**VIII 17, 2** *ā́ tvā brahmayújā hárī vāhatām indra keśínā / úpa brā́hmāṇi naḥ śṛ̥nu*「君を，インドラよ，*brā́hmaṇ-* によって繋がれた　たてがみ持つハリたちが　連れてこい（Präs. Iptv.）。　我々の*brā́hmaṇ-* たちに　耳を傾けよ（Präs. Iptv.）。」

*vacoyúj-*: **VIII 98, 9** → 上例参照

**I 7, 2** *índra íd dhárī yoḥ sácā sámmiśla ā́ vacoyújā / índro vajrī́ hiraṇyáyaḥ*「インドラこそは　ハリたちと共に　一緒にいる［彼］は　言葉によって繋がれた［それら］に［乗れ］，ヴァジュラを持つ　黄金色のインドラは。」[32]

**I 20, 2** *yá índrāya vacoyújā tatakṣúr mánasā hárī / śámībhir yajñám āśata*「インドラの為に　言葉によって繋がれたハリたちを　思考によって　形作った者たち（Ṛbhu たち）は，諸々の努力によって　祭式に到達した（Aor. Ind.）。」

**VI 20, 9** *sá īm spṛ́dho vanate ápratīto bíbhrad vájraṃ vṛtrahaṇaṃ gábhastau / tíṣṭhad dhárī ádhi ásteva gárte vacoyújā vahata índraṃ ṛ̥ṣvā́m*「彼は　その者たちを，競い相手たちを　克服することであろう（Aor. Konj.）[33]，手向かい得ない者として，ヴリトラを殺すヴァジュラを　手に持ちつつ。ハリたちに　彼は乗る（Präs. Inj., generell），射手が　座席に［乗る］ように。言葉によって繋がれた［二頭］は　丈高いインドラを　運べ（Präs. Iptv.）。」

**VIII 45, 39** *ā́ ta etā́ vacoyújā hárī gṛ̥bhṇe sumádrathā / yád īm brahmábhya íd dádaḥ*「君の　ここにある　言葉によって繋がれた　戦車を伴うハリたちを，私は摑み寄せる（Präs. Ind., Koinzidenzfall），祭官たちに　君が与えるように。」

これらの定型句，*brā́hmaṇ-, vácas-, gī́r-, gā́thā-* (Inst.) + *yoj/yuj* や，対応する形容詞 *brahmayúj-, vacoyúj-* が，全て例外なくインドラを運ぶハリたちだけに対して使われていることは[34]，*brā́hmaṇ-* という実現力（を持つ言葉）の存在が「ハリ繋ぎ」に対して決定的な役割を担っていたことを示す[35]。

これに対し，*mánasā yoj/yuj*「思考力によって繋ぐ」或いは *manoyúj-* という表現は，馬，車，思慮（*dhī́-*）に対して用いられるが，「ハリ繋ぎ」の際に使われることはない[36]。*mánasā yoj/yuj*: II 40, 3 *mánasā yujyámānaṃ* (*rátham*), VI 49, 5 *rátho ... mánasā yujānáḥ*, VII 69, 2 *mánasā ... yuktáḥ* (*ráthaḥ*); *manoyúj-*: I 14, 6 *manoyújo ... vā́hnayaḥ*, I 51, 10 *vā́tasya ... manoyújāḥ*

(*áśvāḥ*), IV 48, 4 *manoyújo yuktāsaḥ* (*áśvāḥ*), V 75, 6 *manoyújo 'śvāsaḥ*, VIII 5, 2 *manoyújā râthena*, VIII 13, 26 *dhīyam manoyújam*, IX 100, 3 *dhīyam manoyújam*。I 51, 10 で「君を（インドラを）運んだ」と述べられているのは「Vāta の運び手［馬］たち」であって，ハリたちのことではない。インドラが「Vāta の馬」を繋ぐというテーマは，例えば，V 31, 10a *vātasya yuktān ... áśvān*, X 22, 4 *yujānó áśvā vātasya* などにも見られるが，今問題にしている「ハリ繋ぎ」には関係しないと思われる。これらの表現，*mánasā yoj/yuj, manoyúj-* については，別の機会に改めて詳しく扱いたい[37]。

「ハリ繋ぎ」の儀礼は，インドラがやって来た後でハリたちを戦車/くびきから解く行為や，牽引馬であるハリたちにも食物が与えられること（2, III 35, 3 を参照）などとともに，馬車に乗ってやって来た客人に対する接待の様子を連想させる。馬を車に繋ぐことは，長い旅路の最初の行為として重要な意味を持っていたと考えられるので，「ハリ繋ぎ」が詩人の言葉に宿る *brâhmaṇ-* によってなされるということは，儀礼全体における詩人の役割が必要不可欠であったことを示している。そして，特にインドラの戦車に馬を繋ぐことにこれほどの重要性が置かれたのは，インドラが，敵を倒し掠奪を成功に導くという，人々の生死を決定付ける役割を担っていると考えられたからであろう。

## 3 「新しい歌」

第 2 詩節に述べられた「最新の詩」という表現は，I 82 の理解にとって重要概念の一つである。RV の詩人は度々，自ら歌った（歌っている）歌が「新しい（最新の）」ものであることを神々に対して述べる。これは文字通り，詩人の歌った歌が新しく作られたばかりであることを意味している。神々に帰せられる過去の数々の偉業を，今新たな歌に読み上げることによって，神々にその行為を新しく為す意志と力を与え，それによって詩人たちの望みが叶えられると考えられていたのである。よってしばしば，詩人は神々の以前の武勲を確認するとともに，今新しく称え直して，助力を求めるのである。[38]

**I 12, 11** *sá na stávāna ā́ bhara gāyatrēṇa návīyasā / rayím vīrávatīm íṣam*「そういう君(アグニ)は より新しい歌によって 称えられつつ 持ってこい (Präs. Iptv.), 財産を，男子に富む栄養を。」

**I 61, 13** *asyêd u prá brūhi pūrvyā́ṇi turásya kā́rmāṇi návya ukthā́iḥ / yudhê yád iṣṇāná āyudhānṛ̥ ṛ̥ghāyā́māṇo niriṇā́ti śátrūn*「一方 まさに彼の，貫徹する者の太古の行為たちを 新たに 君は公言せよ (Präs. Iptv.)[39], 讃辞たちによって，(彼が) 自分の武器たちを 戦う為に動かしつつ，荒れ狂って 敵たちを 駆逐するように (Präs. Konj.)[40]。」

**I 62, 11** *sanāyúvo nā́masā návyo arkáir vasūyávo matáyo dasma dadruḥ / pátiṃ ná pátnīr uśátīr uśántaṃ spṛśánti tvā śavasāvan*「よき品々を求める 古来の詩たちが 敬礼を伴って 新たに 讃歌たちと共に，驚くべき者よ，(君のもとへ) 走った (Perf. Ind.)。夫人が 望んでいる主人に 望んで［触れる］ように，君に，増長力を持つ者よ，諸々の意図たちが 触れる (Präs. Ind.)。」

**III 32, 13** *yajñénêndram ávasā cakre arvā́g áinaṃ sumnā́ya návyase vavṛtyām / yá stómebhir vāvṛdhê pūrvyébhir yó madhyamébhir utá nū́tanebhiḥ*「祭式によってインドラを 助力と共に こちらへ 私は向けた (Perf. Ind.)。当人を より新しい善意の為に 私は戻って来させたい (Aor. Opt.)，太古の称讃たちによって 増大した［彼を］，中間の また 現今の［称讃たち］によって。」

**X 39, 5** *purāṇā́ vām vīryā́ prá bravā jánê 'ātho hā́sathur bhiṣájā mayobhúvā / tā́ vāṃ nú návyāv ávase karāmahe 'ayám nāsatyā śrád arír yáthā dádhat*「君たち両者の 昔の武勲たちを 部族の前で 私は公言しよう (Präs. Konj.)。更にまた 君たち両者は 滋養を支配する[41]医者であった (Perf. Ind.)。そういう君たち両者を今[我々への，affektiv]助力のために 新たな状態に 我々はしよう (Aor. Konj.)[42]，ここにいる首長[43]が，両ナーサッティアたちよ，信頼を置くように (Präs. Konj.)。」

今この「新しい歌」の理解に拠れば，I 82, 2 で詩人は，インドラに随行するマルトたちを「最新の詩」で称えた (Aor. Ind.) ことにより，自分たちの望みである掠奪行を成功させるよう，マルトたちを，ひいてはインドラを今新たな活動へと促したものと考えている訳である[44]。

「新しい歌」が持つこの霊的作用の背景には，既述の *brā́hmaṇ-* の観念を伺うことが出来る。つまり，言葉に霊力が宿る為には，それが思想的にも言語的にも詩人の伝統に従う一方で，以前の歌の単なる繰り返しではない「新しい歌」に仕上げられ発語されなければならなかったと考えられる[45]。よって詩人は，インドラ讃歌と更にその締めくくりである「ハリ繋ぎ」の儀礼とを今新たに歌い上

げたことを表明し，最終詩節では，1-5 詩節に宿った言葉の霊力によって，「ハリ繋ぎ」を実現する様を想像しているのである。

## 4 1. Sg. Konjunktiv

Konjunktiv（接続法）は，*RV* の言語において独立したパラダイムを形成する話法（Modus, mood）の一つであり，時制幹の標準階梯形（Vollstufe）[46]＋ *-a-*（法接尾辞）＋人称語尾，で表現される。1. Sg. Akt. の語尾は，わずかの例外を除き幹母音幹で *-āni*, 非幹母音幹で *-ā/-āni* という分布を示すので，*yójā*（1-5 詩節）は，語根アオリストの 1 人称単数接続法（以下 1. Sg. Konj.）の形と同定される[47]。

RV における接続法の機能は一般に「意志， voluntativ」と「未来，prospektiv」とに大別され，前者は文によって表される事態・行為に対し話者が実現如何を握っていることの表明であり，2/3 人称では「…は～するべし/～するがよい」と訳すことが出来る。後者は話者の意志が入らない単純未来を表す：「…は～だろう，～することになる」[48]：

「意志」**VII 33, 14cd**（Agastya の言葉：）*úpainam ādhvaṃ sumanasyámānā ā́ vo gáchāti pratṛdo vásiṣṭhaḥ*「当人（Vasiṣṭha）を 君たち（Pratṛd たち）は拝して侍れ（Präs. Iptv.），善意を抱きつつ。君たちのもとへ，Pratṛd たちよ，Vasiṣṭha は やって来るべし（Präs. Konj.）。」

「未来」**X 10, 10ab**（近親姦を望む妹 Yamī に対する兄 Yama の言葉：）*ā́ ghā tā́ gachān úttarā yugā́ni yátra jāmáyaḥ kṛṇávann ájāmi*「血縁者達が 血縁者にあるまじきことをする（Präs. Konj.），そういう後の諸世代が やって来るであろう（Präs. Konj.）。」

接続法が 1 人称単数で主文に用いられる場合には，殆どが「話者（＝動詞の主語）が動詞の表す行為を未来に行う意志・意図を強く表現する」機能を持つと確定出来る[49]：「私は～しよう」。本稿では，これを話者の「意志表明」の機能と呼ぶ。主文における 1. Sg. Konj. は，RV では 35 箇所（繰り返しを除く）例

証されており[50]，これらは全て，詩人が神々に向かって話しかける時と，神々や神話上の人物が詩人の口を借りて話す時とに分けられる。特に前者においては，称讃の宣言など，神々に対する好意的な言葉が述べられる[51]：

**II 11, 6ab** *stávā nú ta indra pūrv₁yā́ mahā́n₁y utá stavāma nū́tanā kr̥tā́ni*「私は称えよう（Präs. Konj.）今　君の，インドラよ，太古の　大きな［武勲］たちを。また我らは称えよう（Präs. Konj.），新たに為されたことたちを。」

**X 88, 3ab** *devébhir nav̄ iṣitó yajñíyebhir agnīṃ stoṣāṇ₁y ajā́ram bṛhántam*「祭式に値する神々によって　今　駆り立てられて，アグニを　私は称えよう（Aor. Konj.），歳を取ることのない　背の高い［アグニ］を。」

**V 54, 1ab** *prá śárdhāya mā́rutāya svábhānava imā́ṃ vā́cam anajā parvatacyúte*「自らの輝きを伴う　マルトに属する一群に　この言葉を　私は塗り飾ろう（Präs. Konj.），山を揺り動かす［それ］に。」

**VII 86, 7ab** *áraṃ dāsó ná mīḍhúṣe karāṇ₁y ahā́ṃ devā́ya bhū́rṇayé 'ₐnāgāḥ*「下男が［するか］の様に　報酬を払う［ヴァルナ］に対し　わたしは　相応しい仕え方をしよう（Aor. Konj.），活動的な神に対して，咎の無い者として。」

同様に 1-5 詩節 e-Pāda 1. Sg. Konj. *yójā* はインドラに向けられた詩人の「意志表明」を表している。繰り返し表明されたこの「ハリ繋ぎ」への意志は，第 5 歌で実行の命令となり，最後の第 6 歌においては，*bráhmaṇ-* によって実行に移されるものとして描写される。つまり詩人は，自ら歌った「新しい歌」の作用によって，表明してきた自分の意志を言葉通りに実行していると考えているのである。換言すれば，自らの言葉に宿る *bráhmaṇ-* への確信に裏付けされているからこそ，最初から執拗に「ハリ繋ぎ」に対する意志を表明していたと言えるだろう。

## 5 結　論

I 82 に見られる詩人とインドラとの関係は "give-and-take" のそれである。「最新の詩」でインドラを称えた詩人は，そこに宿る *bráhmaṇ-* によってインドラを望みの行為（掠奪行）の実現へと促すことができる。詩人はこの仕組みを心得た上で，「ハリ繋ぎ」への意志を 1. Sg. Konj. によって繰り返し表明する一方，インドラに対しその見返りを要求する。詩人が「ハリ繋ぎ」に関する一連の行為を Imperativ を使って次々に命令してゆく様は，詩人が頭の設計図に従って一方的にことを運んでいるような印象を与えるが，「最新の歌」や *bráhmaṇ-* の思想に現れるように，神々に受け入れられる為に相応しい歌を歌うことによって初めて，自分たちの望みも叶えられるという観念があったのであろう。一般には，RV の詩人は神々に「請い願う」と理解されることが多いが，本論では，両者が *bráhmaṇ-* という言葉の霊力を中心とした契約のような関係の上に立っていたことが示された。後のブラーフマナ文献群における祭式万能主義の思想もこの観点から再吟味される必要がある。

本稿では RV I 82 に歌われる「ハリ繋ぎ」の儀礼を，*bráhmaṇ-* や「新しい歌」の概念と 1. Sg. Konj. という文法範疇の機能の理解を重ね合わせて解釈し，それによって，RV における詩人と神々との関係の再考した。この点に関しては，話者の他者に対する意志が強く現れる 2/3 人称接続法の機能研究によって，今後更なる裏付けとより進んだ理解が期待できるであろう。文献学的解釈と文法機能の解明とが補い合うことにより，RV の理解が更に進むものと思われる。

［キーワード］RV I 82,「ハリ繋ぎ」, *bráhmaṇ-*,「新しい歌」, 接続法

## 註

1 これが，ソーマ祭を締めくくる「ハリ繋ぎ」の際にインドラに供される「別れの盃」であることは，GELDNER Der Rig-Veda. 1951, n. I 61, 16a が指摘している。

2 Padapāṭha と共に *mā́ átathāḥ* と分解し，副詞を後半要素とする Bahuvrīhi *átathā-*「『はい』と言わない者」を想定する，cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER Altindische Grammatik II-1 1905, 124, HOFFMANN Der Injunktiv im Veda. 1967, 54 n. 32。

3 HOFFMANN bei GOTŌ Die "I. Präsensklasse" im Vedischen. 1987, 243。

4 HETTRICH Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen. 1988, 216ff. を参照せよ。

5 従って 1-5 の各詩節は，Paṅkti 韻律（8 音節× 5 Pāda）ということになる。

6 マルト神たちは一般にモンスーンの象徴と見なされ，その場合「好ましい品々」は稲光や雨を意味すると考えられる。しかしこの歌は牛の掠奪行がテーマと思われ(→ **1** を参照)，雨が降れば牛の足跡を辿ることが出来ず（cf. KRICK Das Ritual der Feuergründung. 1982, 306 n. 787)，また河川が干上がっていなければ掠奪隊の動きが取り難いと考えられるので，ここでは初夏（雨期の前）の強い陽射し，或いは初春の陽光が意図されているとも考えられる。掠奪行の時期については，op. cit. 41, 309 n.803, 421 を参照せよ。

7 *váśām ánu*: *yáthā váśas*（Konj.）などと同様，「意のままに・好きなように」を意味する表現，cf. GOTŌ I. Präs. 294。

8 HOFFMANN Aufsätze zur Indoiranistik I. 1975, 29 を参照のこと。但し機能の類似性ゆえに，異なる Modus が主節，従属節に別れて現れることもある，cf. HOFFMANN Inj. 238f.。

9 HOFFMANN Inj. 251ff., GOTŌ I. Präs. 349 を参照せよ。

10 Perf. は，過去に到達・達成した状態が今も続いている（影響を及ぼしている）ことを表すので必然的に過去を包含しているが，過去という時の要素が Perf. の機能において有意的な（relevant な）訳ではない，cf. HOFFMANN Inj. 160, Aufsätze 539, KÜMMEL Das Perfekt im Indoiranischen. 2000, 65ff.。HOFFMANN op. cit. によると，RV において Perf. が遠い過去や起こったばかりの過去を表す為に使われる箇所は，全く見当たらないという。

11 Cf. KÜMMEL Perfekt 272。

12 Pp. に反する同様の解釈例は HOFFMANN Inj. 297 に集められている。

13 HOFFMANN Inj. 199ff., 特にインドラ讃歌におけるこの機能については 124 f. を参照せよ。

14 OLDENBERG Prolegomena 144ff. を参照のこと。

15 OLDENBERG Proleg. 147 を参照のこと。

16 この表現は殆どが「ハリたちを（Akk.）戦車／くびきに（Lok.）繋ぐ（*yoj/yuj*, II 18, 7 では *dhā*「置く」)」で表現される。但し，VII 23, 3 では「戦車を（Akk.）ハリたちと（Inst.）繋ぐ（*yoj/yuj*)」で，同様の構造が I 177, 3, II 18, 5, VIII 50, 7 に

も想定される（→次註)。また V 33, 2（→ **2.1**）の表現も参照せよ。

17 インドラを歓迎する際に「ハリ繋ぎ」が言及される箇所は次の通り：I 6, 2 *yuñjanti ... hárī ... ráthe*; 10, 3 *yukṣvā́ ... hárī*; 81, 3 *yukṣvā́ ... hárī*; 84, 3（→ **2.1**）; 177, 1, 3(例文を見よ), II 18, 3 *hárī ... ráthe ... yojam*（→**2.1**), 7 *hárī dhurí dhiṣvā*, III 35, 1, 2, 4(例文を見よ); 50, 2（*saparyū́*）... *yunajmi*, V 40, 4 *yuktvā́ háribhyām úpa yāsad arvā́ṅ*（「[戦車を（Akk.)] ハリたちと繋いだ後」→註 16）或いは「[ハリたちを] 繋いだ後，ハリたちを伴って」, cf. GELDNER ad loc.), VI 23, 1 *yuktā́bhyām ... háribhyām*, VII 19, 6 *hárī ... yunajmi*; 23, 3 *yujé rátham ... háribhyām*（「戦車を（Akk.) ハリたちと（Inst.) 繋ぐ」→註 16）; 36, 4 *yunájad dhárī*（→ **2.1**), VIII 3, 17 *yukṣvā́ ... hárī*; 4, 11 *úpa ... yuyuje ... hárī*; 13, 27（*sadhamā́dyā*）... *yujā náḥ*; 70, 7-8 *hárī ... yuyójate*; 98, 9 *yuñjánti hárī ... ráthe*（→ **2.1**)。また例文 I 177, 2 のように，ハリたちが複数形で現れる箇所として，II 18, 5 *háribhir yujānáḥ*(恐らく「[戦車を (Akk.)] ハリたちと繋ぎつつ」→註 16), III 43, 6 *hárayo yujānā́ḥ*, VI 37, 1 *yuktā́so hárayo*; 44, 19 *hárayo yujānā́ḥ*, VII 28, 1 *hárayaḥ ... yuktā́ḥ*, VIII 1, 24 *yuktā́ ráthe ... hárayaḥ*（→ **2.1**）; 33, 14 *hárayo rathayújaḥ*; 50, 7 *yujānáḥ ... háribhir*（→註 16), X 112, 4 *háribhir ... yuktáiḥ* が挙げられる。

18 VII 23, 3 に倣って *rátham*「戦車を（Akk.)」を補う。註 16 を参照せよ。

19 更に次の箇所も参照せよ：III 32, 1 *vimúcyā hárī ihá*; 43, 1 *sákhāyā ví muca*, VI 40, 1 *áva sya hárī ví mucā sákhāyā*, X 160, 1 *ví hárī ... muñca*。

20 また次のインドラの言葉も参照せよ：165, 4 *brâhmāṇi me matáyaḥ śám sutā́saḥ śúṣma iyarti prâbhṛto me ádriḥ / ā́ śāsate práti haryantᵢy ukthé- ᵢmā́ hárī vahatas tā́ no ácha*「*brâhmaṇ-* たちは，詩（「思考」）たちは，搾られた［ソーマ］たちは　私にとって　幸である。激情が　［私を］動かす(Präs. Ind.)。挽き臼が　私に　差し出されている。讃辞たちが　［私を］誘い込む（Präs. Ind.)，［私の］気に入る（Präs. Ind.)。ここにいるハリたちが　我々（インドラとマルトたち）を　それらの方へと運ぶ（Präs. Ind.)。」

21 I 63, 9ab *ákāri ta indₐra gótamebhir brâhmāṇᵢy óktā námasā háribhyām*「君のために　つくられた(Pass. Aor. Ind.)，インドラよ，ゴータマたちによって，諸々の *brâhmaṇ-* が，繋ぎ手が，二頭のハリたちへ敬礼を伴って。」b-Pāda は，本来の **brâhmāṇi yóktā*（*yóktar-*「繋ぎ手」m.Nom.Sg.)が，RV 編集にかかる正書法（**KiyV > KyV*, **KuvV > KvV*）により *brâhmāṇyóktā* と書かれたものと解釈し（cf. OLDENBERG Noten ad loc.)，n.Pl. *brâhmāṇi* と m.Sg. ⁺*yóktā* とを，同格に置かれた *ákāri* の主語と考えた（I 61, 16 *brâhmāṇi gótamāso akran* を比べよ)，cf. GELDNER ad loc. n.9b(中性名詞複数が動詞単数と照応する例については，DELBRÜCK Altindische Syntax. 1888, 83 を参照せよ)。DELBRÜCK（Grundriss V 3. 1900, 230 n. 1）は a/b-Pāda を別の文とし，*ā́-ukta-*「公言された」n. Pl を主語 *brâhmāṇi* の述部とする：'geopfert ist dir, o Indra, von den Gotama, die Gebete sind gesprochen mit Andacht den Falben'。KÜMMEL Stativ und Passivaorist im Indoiranischen 1996, 27 も同様の構造を想定。

22 III 53, 4ab *jāyéd ástam maghavan séd u yónis tád ít tvā yuktā́ hárayo vahantu*「妻こそは，有能な者よ，我が家である。彼女こそが［いつもの］居場所である。まさにそこへ 君を 繋がれたハリたちが（Pl.） 運べ（Präs. Iptv.）。」また次の箇所では，送別の盃，つまり，I 82 第 4 詩節にいう *pā́tra- hāriyojaná-* のことが言及されていると考えられる：III 53, 6a *ápāḥ sómam ástam indra prá yāhi*「ソーマを 君は飲んだ。家へと，インドラよ，君は発進せよ。」，X 96（ハリたちへ讃歌），9 cd *prá yát kṛté camasé mā́rmṛjad dhárī pītvā́ mā́dasya haryatā́syā́ndhasaḥ*「酔わせるものである，好まれる［ソーマの］若芽たちの［幾らかを］ 飲んだ後，整えられた柄杓の前で 二頭のハリを 彼（インドラ）がさする時には（Intens. Präs. Konj., cf. SCHAEFER Das Intensivum im Vedischen. 1994, 38f., 167f.），…」，cf. GELDNER ad loc. n. 9c。

23 *-a-* 語幹名詞の m.Sg.Vok. が韻律上長母音になる例については，LANMAN A statistical account of Noun-Inflection in the Veda. JAOS 10 (1880), 339 を参照せよ。GELDNER ad loc. n. 16a は I 82, 4 同様 *pā́tra- hāriyojaná-* を想定し，“ハリ繋ぎに属する盃［を飲む者］＝インドラ”という簡略表現（Breviloquenz）と考える。OLDENBERG Noten ad loc. は *+hāriyojanā́ brā́hmāṇi* を想定。

24 特に，THIEME ZDMG 102 (1952) “Brā́hman” 102ff. = Kl.Schr. 111ff. を見よ。*brā́hmaṇ-* と「ハリ繋ぎ」に関しては，op. cit. 140 = Kl.Schr. 113 を参照せよ。

25 Cf. X 13, 1 *yujé vām brā́hma pūrv₍yā́m nā́mobhir vī́ ślóka etu pathᵢyēva sūrḗḥ / śṛ̥ṇvántu víśve amṛ́tasya putrā́ ā́ yé dhā́māni divᵢyā́ni tasthúḥ*「君たち両者への敬礼を伴って 最初の *brā́hmaṇ-* を 私は繋ぐ（Aor. Inj., Koinzidenzfall），主人の 名声（または声）は 進路のように 分岐せよ（Präs. Iptv.）。不死性に属する（Gen.） 一切の息子たちは 聞け（Präs. Iptv.），天に属する 諸々の座所に 登ったところの［彼らは］（Perf. Ind.）。」 X 13 は二台の祭式用の荷車，Havirdhāna に向けられた讃歌で，ここでは，ハリたちと同様，車を牽くものとして *brā́hmaṇ-* を（Akk.）繋いでいると考えられる，cf. GELDNER ad loc. n. la。

26 この箇所は *vā́casā yoj/yuj* の例証箇所として，SCARLATA Die Wurzelkomposita im Ṛg-Veda. 1999, 431（但し 407 を見よ！）に補うべきである。

27 *ā́+yā*「(乗り物で）やって来る」の Dat. Inf., cf. SCARLATA Wurzelkomp. 407。

28 詩人はインドラに，他の場所で同時にソーマの儀礼を行う見者たちのもとを通り過ぎ，自分の所へ来るよう呼んでいる，cf. MYLIUS “Saṁsava” Wissenschaftliche Zeitschrift der Martin-Luther-Universität Bd. 17, Heft 6, 177ff. = Das altindische Opfer. 2000, 38ff.。

29 GOTŌ I. Präs. 313 を参照せよ。

30 関係詞が受けるものを話者である詩人自身と解釈した，cf. GELDNER ad loc. n. 4。

31 Cf. SCARLATA Wurzelkomp. 428ff.。

32 *vacoyújā* は Akk.Du. とし，「ハリたちに（Akk. Du.）」を補う。GELDNER ad loc. n. の指摘通り，*vacoyúj-* が固定したハリたちの別称であることは本論からも明らか。また「ハリたちに（Akk.）乗る」という言い方は，I 177, 2 *tā́n* (scil. *átyān*) *ā́ tiṣṭha,*

VI 20, 9 *tiṣṭhad dhárī ádhi* にも見い出される。GELDNER op. cit. に従い，*sácā* + Lok. と，*sámmiśla-* + Lok. の両表現が混交して用いられると解釈した。

33 *vanate* は Präs. Ind. か W.Aor. Konj. かのいずれかで，c-Pāda *tiṣṭhad* と同様 generell な用法である。通常前者には語根 *van*[i]「欲する」が，後者には *van*「克服する」が想定され，ここでは後者の意味の方が自然であるから，Aor. Konj. とした。但し両語根の語形が混ざり合っていた可能性は否定出来ない，cf. GOTŌ I. Präs. 283ff.。

34 一方ハリたちの牽く戦車は，ハリたちによって特徴付けられるがゆえに，*háriyoga-rátha-*「繋ぐことがハリたち［に対して］である戦車」，「ハリたちに繋がれる戦車」と呼ばれている：I 56, 1 *eṣá prá pūrvír áva tásya camrīṣó ₍atyo ná yóṣām úd ayaṃsta bhurváṇiḥ / dákṣaṃ mahé pāyayate hiraṇyáyaṃ rátham āvṛ́tyā hári-yogam ṛ́bhvasam*「この者（インドラ）は　これ（ソーマ）の中から　何杯もの桶を分けて［取った］。荒ぶる［彼］は（桶を）上に揚げた（Aor. Ind.），雄馬たちが　雌馬を（そうする）ように。能力ある［ソーマ］を　偉業の為に　彼らは自らに飲ませる（Präs. Ind.），ハリたちに繋がれる　黄金色の精巧な戦車を　転がして来た後で。」

35 また次の歌も参照せよ：I 61, 16 ; 62, 13 (→ **2**), VII 23, 3 *yujé rátham gavéṣaṇam háribhyām úpa bráhmāṇi jujuṣāṇām asthuḥ / ví bādhiṣṭa syá ródasī mahitvé-₍ndro vṛtrā́ṇ₍y apratī́ jaghanvā́n*「牛たちを求める戦車を（Akk.）ハリたちと（Inst.）繋ぐ為に（Inf.），*bráhmaṇ-* たちが　享受した［インドラ］に　立ち待った（Aor. Ind.）。かの者，インドラは　天地両界を　偉大さによって　押しやって広げた，歯向う者のいない敵たちを　倒し終えて。」

36 SCARLATA Wurzelkomp. 428f. を参照せよ。

37 I 20, 2b *tatakṣúr mánasā hárī* (→**2.1**) やIII 60, 2c *yéna hárī mánasā nirátakṣata* のように，Ṛbhu たちが「ハリたちを思考力によって形作った」という表現は注目に値する。

38 Cf. GONDA WZKM 48 (1941) "Ein neues Lied" 277ff. = Sel.Stud. IV 146ff.。

39 *prá brūhi*：詩人が自分自身に命じる，RV で多用されるスタイル。

40 *yád* に導かれる目的節（RV で 26 回）は 2 例を除きすべて Konjunktv を持つので (cf. HETTRICH Hypotaxe 390)，°*riṇāti* は Präs. Konj. である（<**ri-náH-a-ti*）。

41 *mayobhúva-* の背景に *idaṃ bhū*（HOFFMANN Aufs. 557-559）の構文を想定した。

42 全体の文意より，Faktitiv として機能する Dat. Inf. + *kar/kṛ* の構文と考え，名詞 *ávase* に Inf.に近い機能を想定するか（cf. "quasi-infinitives" JAMISON Function and Form in the *-áya*-Formations of the Rig Veda and Atharva Veda. 1983, 37 n. 26, 39)：「新しい君たち両者を（i.e. 新たに君たち両者を）［我々への］助力へと仕向けよう／君たち両者に［我々を］助けさせよう」？

43 Cf. THIEME Der Fremdling im Ṛgveda. 1938, 39 "Fremdling"。

44 Cf. GONDA op. cit., 279 = 148。

45 Cf. THIEME Bráhman, 103 = 112。Cf. TICHY "Indoiranische Hymnen" BURKERT/

STOLZ (Hrsg.) Hymnen der Alten Welt im Kulturvergleich. 1994, 85 :「伝統と改新とは相反するものではない。リグ・ヴェーダ讃歌の内容は，基本的に伝統に根差しているが，その言語的形成に際しては，新しいものが求められた。」

46 RV では，全時制幹（現在／アオリスト／完了幹）で例証されているが，完了幹のそれは極めて未発達である。ETTER Die Fragesätze im Ṛgveda. 1985, 176f. は，現在語幹とアオリスト語幹では時制幹の持つアスペクトの差が認められないことや，疑問文に現れる Konj. の半分以上が語根時制幹から作られていることなどを総合して，Konj. がもともと，語幹とは関係無く語根から直接形成されていた可能性を指摘している。未来形から作られた Konj. *kariṣyā̆s* RV IV 30, 23, *kariṣyā̆* RV I 165, 9（恐らく *kariṣyā̆ḥ* のこと）については，それぞれ HOFFMANN Inj. 248 n. 270, OLDENBERG Noten ad loc. を参照のこと。

47 Konj. Akt. の語尾の形態的・統語的考察とその分布については，HOFFMANN Inj. 248 に詳しい。その成果を幅広く取り入れ，RV における全ての接続法語形の同定を行った研究として，MEIER-BRÜGGER Konjunkiv und Optativ im Rigveda (Habilitationsschrift, Zürich) 1980（未出版）が有用である。

48 DELBRÜCK Der Gebrauch des Conjunktivs und Optativs im Sanskrit und Griechischen. 1871, 17ff., 23ff., AiSynt. 1888, 308ff., BRUGMANN Grundriss II 3/2. 1916, 835, HOFFMANN Aufs. 1976, II 538, 後藤“インド・ヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー　一枠組み再建のスケッチ一”岩手大学人文社会科学部総合研究委員会『文化の基礎理論と諸相の研究』1992, 108 ff. を参照のこと。

49 HOFFMANN Inj., 249, 253 を参照せよ。従属節や疑問文における 1. Sg. Konj. の機能は，例証箇所の少なさに加え（17 箇所）他の要素が複雑に絡み合うため，確定するのが困難である。しかし筆者の検討した限り，「未来」と「意志」という二分方に従うならば，話者の「意志」を確定出来る箇所はない。

50 この中には，形態上は Injunktiv でありながら（語尾-*am*），統語上 Konjunktiv と考えられる形も含まれる，cf. HOFFMANN Inj. 247f.。

51 神々の言葉として例えば：IV 18, 3ab *parāyatī̆m mātā́ram ánv acaṣṭa　ná nā̆nu gānṛ̥y ánu nū̆ gamāni*「去り行く母の後を　彼は目で追った。ついて行くまい（Aor. Konj.），［行く］まい。やはり　ついて行こう（Aor. Konj.）。」（インドラの言葉），X 27, 10cd *strībhī́r yó átra vṛ̥ṣaṇaṃ pṛ̥tanyā̆d　áyuddho asya vī́ bhajāni védaḥ*「この際　女たちと共に　牡牛（＝話者＝インドラ）と　戦をする（Präs. Konj.）者がいれば，その者の財を　戦わずして　私は方々に与えよう（Präs. Konj.）。」（インドラの言葉），X 108, 9cd *svásāraṃ tvā kṛ̥ṇavai mā̆ púnar gā　ápa te gávāṃ subhage bhajāma*「君を（自分の）妹に，私はしよう（Präs. Konj.）。君は戻ってはいけない（*mā̆*＋Aor. Konj.）。君に　牛たちの［幾らか］を，よき天分を持つ女よ，我々は分け与えよう（Präs. Konj.）。」（パニの言葉）。

# Ṛgveda I 82

## — *hariyójana-, brâhmaṇ-*, "The New Song" and 1.Sg. subjunctive —

Eijiro Doyama

Ṛgveda I 82 represents a "farewell song" addressed to Indra, which was most likely recited at the end of a Soma-ritual performed for a successful raid for cows. The main theme is *hariyójana-* 'yoking *hárī*, i.e. Indra's two yellowish horses, [to his chariot]', so that Indra, satisfied with the feast of Soma, could return to heaven, →**1**. The word *hariyójana-* is found in I 62, 13, its Vṛddhi-form *hāriyojaná-* in I 61, 16 and here. While these places indicate "farewell songs" likewise, most of the other instances where "yoking *hárī*" is mentioned assume rather the character of "welcome songs" to Indra, →**2**.

The song is to be interpreted as follows: the poet proclaims that he has just praised Indra's followers Maruts (and so Indra too) with a "newest (i.e. just composed) song" (2nd stanza) and then he yokes *hárī* by means of *brâhmaṇ-* (last st.). *brâhmaṇ-* means "the realizing power existing in the words which are correctly formed and uttered in terms of grammar and the poetic(al) tradition". This suggests that *brâhmaṇ-* functions when the song is newly composed and uttered, → **2.1, 3**. The poet, who is sure of the effects of *brâhmaṇ-* borne in his new song and respectively of the realization of his wishes, expresses repeatedly his own will to yoke *hárī* by the 1.Sg. of the subjunctive mood (1-5 st.), →**4**. It can be then inferred that there lay a "give-and-take" relationship between ṛgvedic poets and gods in the background, →**5**. The later ritualism in the Brāhmaṇas also seems to have developed on the basis of this relationship.